

生化学若い研究者の会「第61回 生命科学夏の学校」開催報告

上甲 裕大¹, 山本 桐也²

(¹第61回 生命科学夏の学校実行委員長 徳島大学, ²事務局長 東京大学)

「生化学若い研究者の会（以下、弊会）」は、日本生化学会後援のもと、生命科学分野の研究に携わる大学院生を中心に構成されています。北海道から九州までの八つの地域で研究セミナー等を開催する「支部活動」、ライフサイエンス誌へのコラム掲載等のアウトリーチ活動を行う「キュベット委員会」、そして年に一度の滞在型研究交流会である「生命科学夏の学校（夏の学校）」の三つの活動を行っています。

今年の「第61回 生命科学夏の学校」は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、当初予定していたオフラインとオンラインの併用によるハイブリッド形式での開催を取りやめ、オンライン会議システムZoomとGatherを使用して3日間にわたり完全オンラインで開催しました。開催直前での急なオンライン開催への変更となりましたが、幅広い専門分野を含んだ151名（うち、講師9名）の方々全国各地からご参加いただきました。

「第61回 生命科学夏の学校」企画趣旨

多様化する現代社会において研究者は、幅広い知識や視野をもち異分野の研究者とも協働することが求められています。しかし、若手研究者が日常的な研究生活でこれらの能力を身につけることは非常に困難です。生命科学夏の学校は上記の社会的ニーズに応え得る若手研究者育成の基盤となることを目指し、各分野の第一線で活躍されている研究者を招いた講演会や参加者同士による研究交流会を実施しております。

本年度の夏の学校は「さあ、集まろう」をキャッチフレーズとし、若手研究者同士が同じ時間を共有し、交流することで、研究室での活動では得ることのできない人脈や知識が醸成されることを狙いました。

ワークショップ

ワークショップでは、6名の先生をお招きしてご講演いただきました。代謝・転写制御といった基礎的な内容から、創薬や不凍タンパク質の応用的な内容、さらには研究者に求められるスキルとして、サイエンスコミュニケーションと科学英語を学ぶ講義もあり、多彩な内容となりました。オンラインながらも講演終了後の質疑応答は非常に白熱し、有意義な時間となりました。

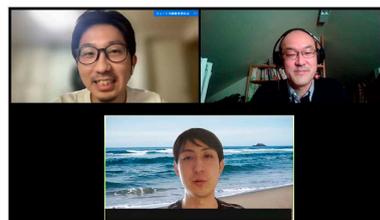


写真1

シンポジウム

近年の生物系研究分野では、ゲノム解析やオミクス解析などの急速な技術発展に伴うビックデータ化が顕著であることから、研究者にとっての利便性を向上させるためのデータベースを構築・管理することは、世界全体での研究加速に多大な貢献を果たしていると認識しました。そこで、今回のシンポジウムでは、生物系の研究者が利用できるデータベース整備の現状と活用方法を学ぶとともに、今後立ち上げが望まれるデータベースの構築について議論することにより、研究者として求められるデータベース活用のための知見・関心を養うことを目的としました。第1部では、実際にデータベースを立ち上げ、運営されている3名の講師陣にご登壇いただきました。データベースの運営状況やその活用方法、更には情報共有を行う意義についてもお話しいただき、生命科学研究におけるデータベースの重要性を再認識するご講演でした。

第2部では、「あったらいいな！こんなデータベース」をテーマとして、参加者同士でグループワーク形式の議論を行い、研究を効率的に推進することに役立つデータベース案を考案してもらいました。

第1部と第2部を通じ、参加者のデータベースの活用や整備、データの統合・共有に対する知見・関心が得られ、今後の研究推進の参考となったようでした。

研究交流企画

先生方の講演だけでなく、若手研究者同士で交流を深められる企画も夏の学校の魅力の一つです。本年度は、研究交流企画として、「研究交流会」、「ポスターセッション」、「自由集会」の三つの企画を用意しました。

「研究交流会」では、初対面の参加者と話すきっかけ作りのために、互いの研究内容や趣味等を紹介し合う場を提供しました。最初は緊張していた参加者も見受けられまし

こんなDatabaseほしいなあ

遺伝子の名前(ensemble IDとgene symbolなど)の統一。Versionが違ったりして困ることが多い。

統一化された実験メソッド、動画の解説。

みんなコメントを付けられる。

目的：新入生にプロトコルを教えたい！自分が新規参入するときに敷居を下げたい。

メリット：実験の再現性が良くなる。

生物の三次元形態データベース

合成生物学のパーツDBとNCBIのゲノム情報などの統合
生物学と工学の融合？



写真2



写真3

たが、すぐに打ち解けて白熱した議論が展開されました。

「ポスターセッション」では、様々な分野をバックグラウンドとする参加者による研究発表が行われ、研究交流会よりも踏み込んだ活発な意見交換がなされました。普段とは異なる視点からの意見・アドバイスを得て、今後の研究のヒントを得たという声もありました。

「自由集会」では、参加者が日頃気になっているトピックをトークテーマとして、グループに分かれて討論・交流を行いました。幅広くユニークなテーマのもと熱く語り合

うことで、参加者同士のつながりも深まったようでした。

夏の学校から広がるもの

「生命科学夏の学校」には“生命科学”に興味をもつ若手研究者が集います。生命科学は幅広い分野を包含しており、本研究会が取り扱う内容は非常に多岐に渡ります。そのため、所属する研究室では触れる機会のない分野や、交流する機会のない人と出会うことができます。日頃の研究生活では得難い経験の宝庫である夏の学校への参加は、自

身の見識を深めることにつながります。

さらに本年度は、オンライン開催を実施したことにより、移動がネックで参加をためらっていた若手研究者を呼び込み、これまでにない新たなつながりを創出することに成功しました。弊会が主催する支部活動やキュベット委員会活動を通じてこのつながりをさらに深めることで生命科学の発展に寄与できるよう、今後とも尽力してまいります。

来年度に開催予定の「第62回 生命科学夏の学校」は、“あなたを、多角的に見つめる”をキャッチコピーに掲げ、

既に準備が進められております。新たな運営スタッフ陣のもと、来年度の夏の学校も盛大に開催されることを心より願っております。

最後になりましたが、本年度の夏の学校の開催にあたり多大なご支援を賜りました、日本生化学会をはじめとする法人・企業の皆さま、ご講演いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

(生化学若い研究者の会・第61回 生命科学夏の学校についてはこちら：<http://www.seikawakate.org>)